

小川国夫とウィリアム・フォークナー

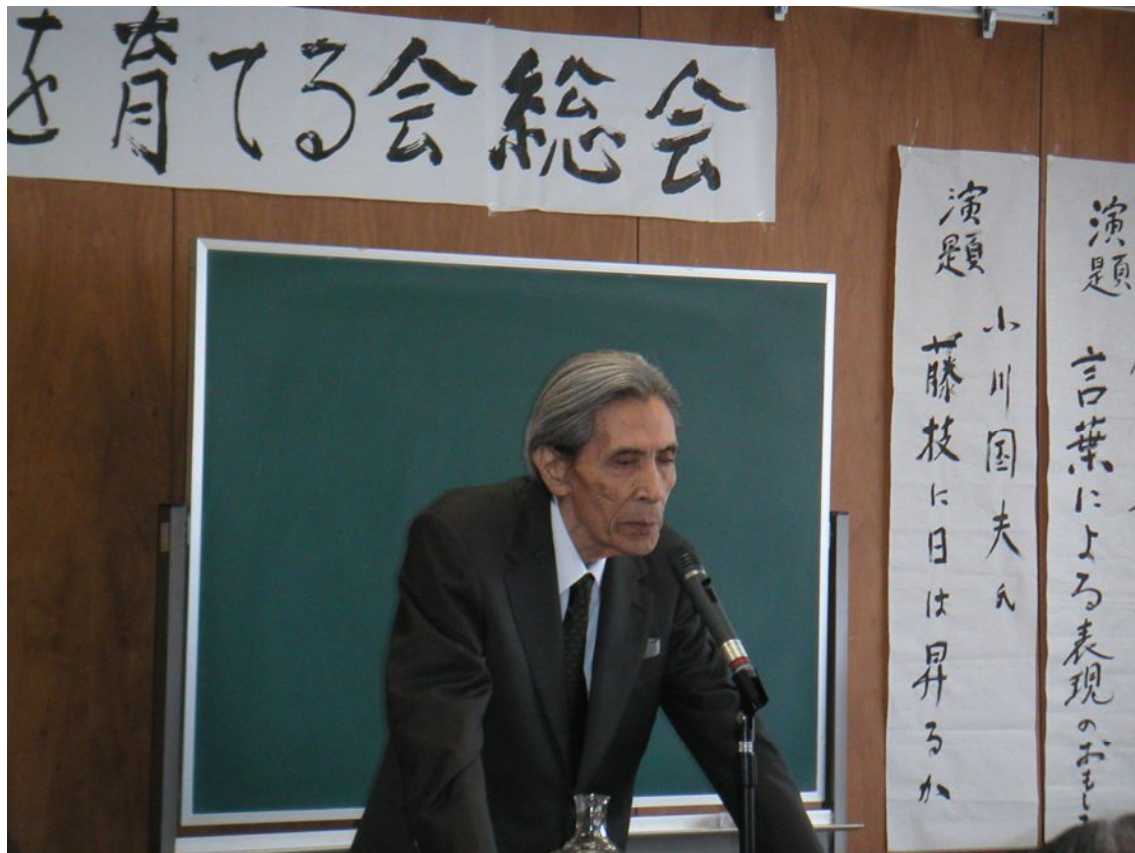
Ogawa Kunio and William Faulkner

石井 洋子

ISHII Yoko

Abstract: OGAWA Kunio [1927·12-2008·4], a Christian writer who represented the literature world in Japan, was born in Fujieda City, Shizuoka Prefecture and died there in 2008. William Faulkner [1897-1962] was a writer who represented the literature world in the United States of the 20th century and was awarded the Nobel Literature Prize. Both in OGAWA Kunio's and William Faulkner's works fundamentally 'exist' *the Old Testament* and *the New Testament*, but their works are quite different from each other. OGAWA's works were much influenced by Faulkner's. OGAWA's essay, "The Hunter of Passion" (1974) is indeed a notable comment on Faulkner; it is attached to *William Faulkner's Complete Works Vol. 6: As I Lay Dying* published by the Fuzambo in Japan. There is also OGAWA's essay written in 1980 titled "The Letter"; it is contained in *Complete Works Vol. 3: Literature and the United States* published by the Nan'un-do in Japan, compiled by Prof. OHASHI Kenzaburo 60th Anniversary Commemoration Theses Publication Committee. The present writer also noticed OGAWA's four other essays. His *Look at the Hometown* published by the Shizuoka Shimbun in 2007 is a portrait of himself as a devout Christian writer. It was expected that he would write more novels and essays for his great number of admirers, but unexpectedly, OGAWA Kunio passed away (returned to heaven) on April 8, 2008. His Christian name was Augustine. The present writer prays for the peace of his soul.

Keywords: OGAWA Kunio, William Faulkner, *the Old Testament*, *the New Testament*, "The Hunter of Passion", *As I Lay Dying*, "The Letter", *Literature and the United States*, OHASHI Kenzaburo, *Look at the hometown*, Christian name: Augustine
小川国夫、ウィリアム・フォークナー、『旧約聖書』、『新約聖書』、『情熱の探求者』、『死の床に横たわりて』、『手紙』、『文学とアメリカ』、大橋健三郎、『故郷を見よ』、洗礼名:アウグスティヌス



石井洋子撮影

演題 「藤枝に日は昇るか」

日時 2007年4月8日

場所 藤枝市藤枝文化センター

はじめに

小川国夫は、初めてフォークナーの作品を読み親しんだのは、高橋正雄訳の『響きと怒り』であったと述べている。この事実から繙くとフォークナーの『響きと怒り』の影響を受けて書いたのが、『闇の力』1958年11月であったということが判明する。小川国夫もフォークナーも、必携の書である『聖書』を創作活動に生かすことなど、創作上、きわめて普通のことであった。しかし、両者は『聖書』を基底にしなが、大きく違った方向に傾いていくのである。すなわち、フォークナーは、歴史的な観点が加味されてきて現実主義(realism)には至らないのであるが、小川国夫は、フォークナー作品の影響を受けながら現実主義(realism)の世界へと向かうことになる。フォークナーは歴史上の人物である。小川国夫は活躍中の作家であったが、彼はつい先日2008年4月8日「帰天」した。

小川国夫はフォークナーを、どのような目で見ていたのであろうか。エッセイ・解説の中から探りたいと思う。

I. 「情熱の探求者」—*As I Lay Dying*から—

アメリカをよく知るために最も注目すべき文献の一つとして、最初にアメリカの大地を踏んだ者たちによる報告書がある。その報告書によると、アメリカの建国に関わる問題として、最初に渡った人たちがまず願ったことは、エデンの園のような国を建設することであった。アメリカの文学史とされる書物の中には、エデンの園を作りあげてことを発端としていたという記録が残っている。¹⁾

周知の1620年(元和6)の晩秋に、メイフラワー(Mayflower)でプリマスに上陸したウィリアム・ブラッドフォード(William Bradford)たちは、ピルグリム・ファーザーズ(Pilgrim Fathers)というが、彼等はイギリス国教会からの分離派(Separatist)と言われている100名ほどのグループであった。²⁾

別のグループとして、ボストン(Boston)に上陸した、マサチューセッツ・ベイ(Massachusetts Bay)植民地をおこしたジョン・ウィンスロップ(John Winthrop)たちは、イギリス国教会の中にとどまっていた1000名ほどのグループで、“purify”と呼ばれた。彼らは正統的なピューリタンであるが、分離派の人々も広義にはピューリタンである。³⁾

ウィンスロップたちは「聖書に基く国家」(Bible Commonwealth)の建設に着手しようとして神政政治(theocracy)という政教一致の方法を望んだ。彼らの教会は、神学的にはカルヴァン主義であったが、教派的には会衆派(Congregationalism)に属していた。⁴⁾

ウィンスロップたちが望んでいたことは、彼らの教会を国教にするための方策であった。この点においてはブラッドフォードたちも同じ考えをもっていた。しかし、イギリス国教会と同じに自分たちと意見の異なる人々を追放してしまったので、初代の指導者は役人と牧師だけであった。彼らによって神政政治の体制樹立に成功し、ピューリタニズムは社会

の隅々まで浸透して行った。それ以来キリスト教の史上稀に見る強固な宗教的社会が成立した。⁵⁾ 2006年(平成18)7月25日、筆者は、アメリカにおける『聖書』の理解について、小川国夫から次のような話を聞くことができた。

アメリカという国は、初めイギリスから渡って来た人々はキリスト教徒であったから、その子孫である現在の人々に至っても『聖書』は良く読まれている。ことに『聖書』(旧約)は読まれている。また、フォークナーが『聖書』を題材として小説を書いているとしても、アメリカ人にとっては極めて日常的なことである。キリスト教の国家アメリカでは、『聖書』は馴染みふかい書物であった。例えば、我々日本人であるならば、平家物語の背景に仏教の存在があるのと同じような感覚である。⁶⁾

小川国夫の、このようなアメリカという国に関する考え方は、これからのフォークナーの研究においても大いに役立つものであると思われる。アメリカの人々にとっての『聖書』の捉え方は、極めて日常的なカテゴリーであることが判明した。

小川国夫のエッセイ・解説の中において、筆者が最初に挙げるのは、彼が、フォークナーを論じた「情熱の探求者」というエッセイである。これは『フォークナー全集』第6巻『死の床に横たわりて』に掲載されたものである。この中で、小川国夫は、フォークナーの特徴を綿密にあげているが、『死の床に横たわりて』についての批評にも多く言及しているのである。小川国夫は、フォークナーの小説について次のようなことを述べている。

なぜそう思うかという、先ず彼の作品はことごとく推理小説の面白味を含んでいるからだ。この種の小説は、途中でしばしば立ち止まって考えることはあるとしても、筋の綾目をたどってひたすら読み進むところに醍醐味がある。ところが、少なくとも私がフォークナーに対する場合には、そうした醍醐味が、対岸にあるような気がする。つまり、推理小説を味わうに必要な読書のスピードが出てこない。これは読む方の責任でもあるけれど、書き手のフォークナーにも責任がある。⁷⁾

小川国夫はフォークナーの作品について、全てに推理的な部分がありながら、「そうした醍醐味が、対岸にあるというような気がする」と言っている。すなわち、読み手の中になだれ込んでくるような、滑らかな文体ではないことは、負荷が加わることになるのだろう。これらのことは「書き手であるフォークナーにも責任がある」と言っている。推理小説を読む場合と違ったところに彼は、魅力を感じているが、だからと言ってフォークナーの醍醐味の全てを知ったとは言えない。いまだに彼は〈宝の山〉として評価しているのだ。

小川国夫は、第一にフォークナーの魅力は、描写力だと言っている。フォークナーの魅力的な表現について、暴風の中で川を渡る描写にしても、人物の動きと馬の動きを的確に

描写している。すなわち、瞬間的な描写をすることは、緊張関係にある人物或いは動物の姿を、一つの画面として捉えることである。そして、その画面を繰り返して描写することである。このことは、フォークナー作品に対してだけ言えることではない。小川国夫の作品の表現にも当てはまることであるように思われる。つまり、小川国夫の文体もフォークナーと同じような描写が感じられるのだ。

次にフォークナーの弟、ジョン・フォークナーが兄ウィリアムについて語った発言の一部を挙げて見よう。

I have read almost everything Bill ever wrote. I liked all of it, some better than others, personal favorites that seemed better written than others. A great many people, I think, try to read too much into Bill's writings. It simply is not there nor was it intended to be. If they would read him for the stories he was telling they would realize what a good storyteller Bill was. ⁸⁾

(私はビルの書いたものは大抵読んでいる。全部好きだ。あるものは、ほかのものよりよい。個人的な好みによって、それは異なるだろう。多くの方は、ビルの著作の中にあまりにも多くのものを読み取ろうとしすぎるように思う。読み取りたいものはそこにはないし、またそのつもりで書かれたものでもない。彼が語りかける物語として読めば、ビルがすぐれたストーリー・テラーであることがわかるだろう。)

上掲は、『響きと怒りの作家』の著者でもあるジョンの言葉で、実兄を真近に見ての発言であるだけに鋭く、まことに興味深い。つまりフォークナー論の核心を衝くものであって、もとより小川国夫も、この弟ジョンの言葉に注目し、時には自分の文章の中にもその一部を取り込むことさえあった、ということである。その小川国夫は、このジョンの言葉に対し、次のように述べている。

フォークナーを読むのにはあまり頭をひねらなくてもいいという趣旨に受け取って、私もそうして見ようとしても、さて現物にぶつかるとそうはいかない。⁹⁾

この発言からも察し得るように小川国夫は、フォークナーの文体についてあまり深く考えないで、2回あるいは3回と繰り返し読み進むことが、肝心なことであると述べている。また、小川国夫は、フォークナーの小説に措定されている山場としてのカタストロフィーにおいて、劇的に追い込みを感じさせる場面がある、その迫力は、彼の第2の才能であると指摘している。

また彼は、遺体を荷馬車に乗せて、洪水期の川を渡るという危険な行動をするというプロットに疑問を表明している。すなわち、アディの死骸を22マイルも離れたジェファソン

へと運ぶことの意味は何処にあるのであろうか、と小川国夫は思っているのである。このところは、次の発言によっても明らかである。

洪水と火事を、単純で普遍的な自然の災害ということはできよう。死体を運ぶことも単純で自然な動機ということもできよう。しかし、これほどまでして死体を運ぶとなると、その動機を単純で自然だとはいいがたい。この辺のことが、後にフォークナーがアナクロニズムといわれた理由かも知れない。(略)フォークナー世界とはこういうことなのだ。だから、フォークナーが頭から離れなくなったら、このことを考えて見ないわけには行かない。¹⁰⁾

上掲の小川国夫の所見にもあるように、バンドレン一家がアディの死骸を運ぶ途中で遭遇する暴風の中において、川を渡る苦難と火災による被害をうけながら死骸を運ぶという意義はどこにあるだろう。この辺りがフォークナーをアナクロニズムだと言うところであるかも知れない。と、彼は言っている。

妻の遺体を22マイル離れたジェファソンに運ぶことは、夫も同意している。だが夫アンスの願望は、暗闇に隠されていて誰も気づいていないのである。ジェファソンでアンスを待っているものは、新しい義歯であり、新しい妻と蓄音器であるのだ。貧乏白人の家族旅行のようになった母親の遺体の埋葬旅行という名の基に、夫々に暗闇に隠している目的があった。それは、墮胎薬、おもちゃの汽車等であったが、これらのことは隠蔽され物語は進行して行く。しかし、ダールは違っていた。悪臭を放ちはじめたアディの遺体が他人の納屋に置かれている時、放火してしまうのである。彼は放火したことによって埋葬旅行を妨害する結果を招くが、そのことは、母の意志に反逆したことになった。

小川国夫は、かつて筆者に次のようなことを言った。「最も新しい手法で、最も古い枠の中で書いたのが『響きと怒り』である」と。¹¹⁾ このことは、『死の床に横たわりて』においても同じような場面を想像させる描写があると言えよう。次に挙げるテキストは、『死の床に横たわりて』の冒頭の部分であるが、『旧約』聖書の近似・類似の表現であると言えよう。

Jewel and I come up from the field, following the path in single file. Although I am fifteen feet ahead of him, anyone watching us from the cottonhouse can see Jewel's frayed and broken straw hat a full head above my own. ¹²⁾

(ジュエルとおれは畑を出て、一列に、小道を歩いて行く。おれのほうが十五フィート先を歩いているのだが、誰かが綿小屋を見ていたら、ジュエルの擦り切れた麦藁帽子が、首ひとつおれより上にあるのがわかるはずだ。)

上掲は『死の床に横たわりて』における最も美しい文体である。「麦わら帽子が、首ひとつおれより上にあるのがわかるはずだ」とあるところ、この重要場面は、『聖書』（旧約）の「サムエル記上」9-2中の「彼には名をサウルという息子があつた。美しい若者で、彼の美しさに及ぶものはイスラエルにはだれもいなかった。民のだれよりも肩から上の分だけ背が高かつた」。¹³⁾ とあるが、このところはフォークナーの『聖書』からの類似点を窺わせるものである。小川国夫は、その箇所をフォークナーの『聖書』（旧約）からの近似・類似であることは認めている。その限りにおいて『死の床に横たわりて』も『聖書』からの影響が多分にあると思われる。

小川国夫は、残されたアンス(アディの夫)が妻の願いを聞き入れたかについては、「アンスは相応に妻を愛し、神を怖れていたのであろう」と、言っているが、さらに「妻との約束を果たした上で再婚へと踏み切つたと思われる」と、述べている。

アンスの胸にあつた約束という言葉がジュエルの中に探せば、母親の意志として、彼の中に宿つた意志は、一挙手一投足に現れている。母親に愛されたジュエルは、必死の思いで母の遺体をジェファソンへと運ぶが、ダールは、母親に愛されることはなく、彼は旅の途中で納屋に放火して母に反逆することになった。このように母の遺体を故郷の土地に埋葬するという使命をもつた道程での推進者は、ジュエルである。彼についての小川国夫の言葉を次に挙げよう。

母親の埋葬地のすぐそばまで来て、最後の丘を登る一族の姿は、なんと空しく、しかし、なんと生き生きと描かれていることか……。もう両側に黒人の小屋が並んでいる。前方の空に電話線がかたまって走り、郡役所の大時計が木々の間にそびえているのが見える。ジュエルは通りすがりの男と喧嘩をおっぱじめる。¹⁴⁾

このジュエルの喧嘩の始まりは空耳であることがわかって来る。後にこのジュエルの喧嘩の始まりについて小川国夫は言及し、〈空耳〉の内容は〈死臭についての発言〉¹⁵⁾ であつたと述べている。彼のいうところによれば、この時ジュエルは火傷を負いながら、ゴールを前にして昂ぶっていた。それは、〈空耳〉ではなく、実は、昂ぶっていたと考えられるのは〈死臭〉が原因であつたと訂正しているのだ。ジュエルの、ジェファソンへの到着は、彼の最大の喜びであつたと思われる。しかし、彼の脳裏には母の死骸が発する匂いが、周囲の人々にどのように受け容れられるか、ということは最大の悩みであつたろう。ジェファソンに到着して、始めて遭う人に〈死臭〉について暴言を吐かれたとすれば、ジュエルの喧嘩の原因もわかって来る。このようなフォークナー世界の構図には、秘密な部分があつて読者にはわからない。この隠された事実に対して小川国夫はフォークナーとの対談形式にした質問状を掲載している。その中の一つ、小川国夫がフォークナーに言つた印象的な言葉を次に挙げて見よう。

小川 そうですか。それで解りました。あなたの小説は、<知りたいか、それなら教えない>とっています。¹⁶⁾

上掲の言葉でわかるようにフォークナーは、読者に推理させるのではなく、彼の書くという行動自体が、そのまま推理の一形態であると小川国夫は言っている。最後になったが、この物語におけるフォークナーの思想の表れとして、脇役であるキャシュに光が当てられている。すなわち、キャシュは生き抜き、未来の地平に爽やかな微光を見る者になると結んでいる。小川国夫はこのキャシュについて次のように述べている。

この種の人物を説明して行けば、フォークナーの思想に言及することになるだろう。そして、聖書——それも主として旧約聖書に至るであろう。そのことから、例えば《死の床に横たわりて》にしても、別の照明を当てることが可能となるであろう。¹⁷⁾

この脇役であるキャシュに光を当てることは、フォークナーの思想に到達し、従来にはない別の批評が考えられる、と小川国夫は述べている。『死の床に横たわりて』の批評は多いが、小川国夫は、主として『聖書』(旧約)を基底にした見方をしている。それは、またフォークナーの姿勢でもあるだろう。小川国夫とフォークナーの『聖書』(旧約)及び『聖書』(新約)に対する考え方の違いは、次に述べることとなる。

II. 「フォークナー世界の構図」について

ここで取り上げる「フォークナー世界の構図」は、小川国夫が『筑摩世界文学大系フォークナー』の第73巻の「付録」(昭49・2)へと寄稿したエッセイである。この中では岡庭昇の『フォークナー —吊るされた人間の夢—』(筑摩書房、昭50)をまず最初に取り上げている。そこで筆者も、彼が取り上げた箇所から注視していくことにしたい。

喩えとしての実存！クエンティンはハーバート大学に進学し、キャディの結婚式の日

に自殺する。いっぽう、キャディは結婚したときすでに子供を妊っており、それを理由に離婚され、行方不明となる。だが、そういう結末に、ことあらたにつけくわえられたな

ながあろう。それは、彼らの「血縁」がどのような意志によっても自己否定しきれないものであるように、もともと宿命とよばれるべきものであり、すいかずらの匂いにつつまれたクエンティン家の初夏の闇のなかに決定づけられていた本質の枝葉にすぎない。すべては記憶であり、断片であり、虚実の皮膜を流れる。初夏の夜の薄明と、水の流れる音と、点在する灌木、咽喉につきつけられたナイフと震える手、「不当な」嫉妬と絶望と唯一の「行為」としての涙……。どこにも先験的に「意味」づけられるものはない

ように、また、どこにも救済はない。なぜなら、すでに破滅や挫折そのものが、追いつめていくとどこまでも遠ざかっていくような、真理の闇の幻影に、もともとほかならないからである。非在としての敗北と実態としての絶望が、等比的につりあっている。これほどの地獄はないにちがいない。だが、水鬘の匂いに包まれた彼らの像は、ようするに私たちの現存の、むきだしにされた本質にほかならないのだ。¹⁸⁾

上掲の言葉にもある通り、岡庭昇の言う「喩えとしての実存！」というその言辞は、コンプソン家の子供たちの姿を言っているものと思われるが、クエンティンもまたキャディも実存として捉えられるものではない。「すべては記憶であり、断片であり、虚実の皮膜を流れる。」と言っているのだ。唯一つの「行為」として涙が挙げられるが、先験的に意味づけられるものはないし、救済もない。「非在としての敗北と実態としての絶望が、等比的につりあっている」とあるように岡庭昇の指摘は核心を突いている。

さらに、物事の本質は、「言ってみれば水鬘の匂いに包まれた彼らの像は、ようするに私たちの現存の、むきだしにされた本質にほかならないのだ。」とあるところ、すなわち、現存するのは、水鬘の匂いに包まれたクエンティンとキャディの現存の姿だけである。と、小川国夫も、岡庭昇の論点に同意しているのである。

小川国夫は、『死の床に横たわりて』におけるアディの内的独白に言及し、彼の所見を明らかにしている。その場面を次に挙げて見よう。

言葉ってものは、手早く無実にも、細い一列にならんで、まっすぐに空に上がって、一方、行為のほうはひたすら大地にしがみつき、地べたを這ってゆくので、しばらくたつと、この二本の列はひとり人間では到底跨ぎ切れぬほど遠くはなれてしまうのだ、が、全然知らぬことを表すための、ただの音にすぎないし、この連中には、知りようもないものなのだ。¹⁹⁾

このアディにとっては、「言葉は真っ直ぐ空に上がって行くものであり、行為は、地べたを這って行くものであるとしている。」だからアディは、罪というものは存在するが、罪という言葉は空虚なものであるとしている。アディにとって大切なものは、行為であると小川国夫は思うのである。

その結果、アディの思いは独走し、孤独なひとりよがりになり陥ってしまうことになるが、彼女の遺言の結果として、ミシシッピの流域を走る馬車について小川国夫は次のようなことを述べている。

勿論《死の床に横たわりて》はアディの思いが夫や息子たちにそれぞれに影響して、ミシシッピ流域を走る馬車になるわけだから、この棺を積んだ馬車は、女の亡霊とで

もいうべきであろう。亡霊はまことに過酷で、空しい行為を一族に余儀なくさせたものだ。²⁰⁾

このように、ミシシッピの辺を走る馬車はアディの亡霊である。腐って行く母親の死骸を洪水と火災に遭遇しながら、故郷の墓地まで運ぶこのグロテスクな空しい行為を夫や子供たちに強いる過酷な旅行である。と、小川国夫は言っているが、反面、物語の主要な部分は、このグロテスクな道中であることを思うとき、アディの執念の恐ろしさが迫って来るような感覚も見逃すことはできない。

『死の床に横たわりて』において、一人の女性が命を懸けて護ったこととは、牧師ホイットフィールドとの愛を生涯秘密にすることであった。そのようにしなければならなかったのは、いわゆる、アメリカ的な『聖書』社会がもたらした結果であると言えよう。バンドレン一家のグロテスクな旅は、女の亡霊の旅であるというところなど、比類なきリアリズム的な表現は、小川国夫独特な批評である。

小川国夫の言葉によれば、フォークナー自身は、岡庭昇のいう「吊るされた人間の夢」の世界へ入ることもあるが、また抜け出ることもあると、言っているのである。つまり、フォークナーは、「吊るされた人間の夢」の中の人でもあり、またその世界から抜け出て来る人でもあるのだ。だが、次のような批評も挙げている。

フォークナーの濃密で広い内面と外界には、その重層構造には、それを支えようとしているなにかがある。これをフォークナーの世界観といってもいい。²¹⁾

上掲のような小川国夫の言葉は、フォークナー作品の特筆すべきこととして、『旧約聖書』の中から物語のプロットを得ることもあり得ることを示唆している。またその基底には歴史観も存在し、重層構造をなしていることに注意を向けていると思われる。小川国夫はフォークナーの世界観に深く感銘している。さらに彼は、岡庭昇の立場に共鳴し、牽強付会とも言うべき言論を示しているのである。次に小川国夫のキリストに関する見解を引用して見よう。

聖書でもってキリストが、高い次元の教えを言う場合に、卑近な喩え話をしますね。金銭とか体面のこと、それからセックスに関係したことさえあります。そして喩え話の結論として、実は私の言いたいのはこういう教えだというふうに説いていくわけですが、私どもは、おのおのの生において、結論は与えられずに、喩え話だけ与えられているという具合に思うんです。つまり、喩え話の不分明な茂みの中から、結論の方へと近づいている。そういう状況の中に自分がいるという感じを持っているんです。これは勿論文学だけの問題じゃあなくて、生き方にもつながってくるわけなんですし、いわ

ゆる〈行く手〉には過去の影が落ちている、という意味では原体験ということも関係していると思います。²²⁾

上掲の小川国夫の言葉の中でキリストの言辞に関係するものとして、喩え話よっての教えがある。私たちは身近な喩え話で自分のなすべき方向を探さなければならないと言っている。さらに「〈行く手〉には過去の影が落ちている」と言っているが、それは、原体験に関わることであるとしているのだ。すなわち、人の思想形成に大きく影響する幼少時の体験を言っているのである。このように原体験にまでも言及することは、キリストは命がけの論争の中で喩え話をしたのである、と小川国夫は言っているのだ。

小川国夫の見解によれば、キリストは『聖書』(旧約)についての知識は奥深いものがあり、キリストの喩え話の源は明らかに『聖書』(旧約)にあったと示唆している。キリストは『旧約聖書』に対して、一つの山のように喩えているが、その頂上を築こうとしていたと言っている。その山は、キリストによって築かれたが、このようなキリストについてフォークナーは、どのように見ていたのであろうか、と小川国夫は疑問を残している。

勿論小川国夫もフォークナーも『聖書』(旧約)と『聖書』(新約)を基点としての作家であることは言うまでもない。次に小川国夫は、『聖書』とフォークナーの作品について、どのように理解していたかを挙げて見よう。

こうした彼の歴史観が、聖書から得た原体験から萌したことはいうまでもない。私は原体験と書いたが、南部人フォークナーにとっては聖書は体験であった。特に南部では、開拓の過程で、聖書はインディアンにも白人にも黒人にも染みこんだものであった。そこは、剥がしようもなく聖書の影が落ちている土地であった。この意味でフォークナーは、むづかしい考え方をした人ではなくて、むしろ、自然発生的な考え方をした人だ。土地という共有物を通して、まず南部の人々に呼びかけようとした。そしていわば土地を理解する鍵を得ようとした。したがって、彼の作品はリアリズムとはなり得なかった。延々と即物的な叙述が続くことはあっても、奥にリアリズムと融け合わない歴史観があった。²³⁾

上掲にあるように小川国夫は、フォークナーの歴史観について次のように述べている。「彼の歴史観が、聖書から得た原体験から萌したことはいうまでもない。私は原体験と書いたが、南部人フォークナーにとっては聖書は体験であった。」と言っているのだ。この考え通りにフォークナーにとっての『聖書』は、彼の人格形成に言及した幼少時からの体験であったことを窺うことができる。

またフォークナーの作品は「歴史観が満ちていてリアリズムにはなり得なかった」とあるのだ。南部においては、インディアンにも白人にも、また黒人にも『聖書』は染みこん

でいるものであった。フォークナーの描いた架空の地域、ミシシッピ州北部に設定されたヨクナパトーフア郡には、根底に歴史的及び風土的な現実を常に秘めながら、作品には関係することなく主題は常に異なり、そうした様相は二重写しにされ、象徴的あるいは暗喩的な意味合いを持っている。そしてフォークナーの世界も『聖書』を原点としている。

小川国夫は、フォークナーのそうした面を深く感じ取った作家である。小川国夫の作品も『聖書』を原点とし、歴史的な意味合いもあり、また現実的な考えにも満ちている。リアリズムという点においてフォークナーの世界と異なるのである。小川国夫は、『聖書』を原点とし、彼の作品はリアリズムに徹していると考えられる。

Ⅲ. 「手紙」について

「手紙」と題するエッセイは、『文学とアメリカⅢ』（大橋健三郎教授還暦記念論文集刊行委員会刊 1980）に寄稿されたものである。フォークナー文学に魅了されたという姿が見えてきて、小川国夫のフォークナー作品にたいする敬意と賞賛の思いの深さが十分に窺い得るところである。

彼は初めて『響きと怒り』を読んだのは、1956年か1957年だったろうと言っている。「世界にこの本だけあればいい」²⁴⁾ という過激な経験をしたと言っているのだ。その後直ぐに「私は、もはや勉強のための読書はいたしません。すべて読書は楽しみのためです。」²⁵⁾ とも言っている。

小川国夫は、読書は充実した時間を得るためであることを強調し、本の〈名〉よりも〈実〉が欲しいし、〈知識〉は不要で〈愛〉を感じたいと言っている。小川国夫の読書の主座になっているのはフォークナーであることを強調しているのだ。

次に彼の心を捉えたのは『八月の光』と大橋健三郎の『フォークナー研究Ⅱ』である。ジェファソンという町は「ハイタワーの心の町」であると感じているのである。小川国夫は、ハイタワーの「フィルター」の外に他の登場人物を大写しにしたという『八月の光』の構成の複雑さを挙げているのである。

『アブサロム、アブサロム！』については、『聖書』（旧約）の「サムエル記下」のダビデと息子のアブサロムについて小川国夫は講演²⁶⁾を通して、プロットが丸写しであることを述べている。すなわち、ダビデの子にはアブサロムと妹のタマルがいたが、彼ら兄妹には母親違いのアムノンという存在があった。タマルにとって、母親の異なる兄アムノンは、タマルを愛していた。あるときアムノンはタマルを騙して陵辱した。アブサロムは、アムノンを討ち殺して復讐を果たしたが、その後アブサロムは、父ダビデの命により撃たれるのであった。アブサロムは美しい青年であったので、彼の黒髪は一年に一度しか切っていなかった。彼は驟馬に乗って櫛の木の下を通ったとき、髪が櫛の木に引っかかってしまった。驟馬はそのまま行ってしまったので、アブサロムは櫛の木に宙吊りになった。そこを、父ダビデの軍隊の兵によって、心臓を突かれて死んだ。

フォークナーの『アブサロム、アブサロム！』においては、主人公トマス・サトペンとその子供、ヘンリー・サトペンと妹のジュージス・サトペンの他にトマス・サトペンの離婚した妻の子供であるチャールズ・ボンの関係は、「サムエル記下」のダビデとその子供たちの関係であるとした。現在我々の読む「サムエル記下」においてもその関係は、納得できるものである。

小川国夫は子供時代から『聖書』(旧約)に親しんでいた。筆者は講談社の『聖書の世界』(1970)一巻から六巻までを読んでいたとき、その二巻の「月報4」(1970・7・24)に小川国夫の「旧約聖書と少年時代」が掲載されていたのを、感激して読んだ。彼は20歳でカトリックの洗礼を受けているのである。『聖書』(旧約)と『聖書』(新約)に親しむことは、子供時代からであった。

小川国夫は、大橋健三郎に「フォークナーを知る者」と言っていたことを大変喜ばしく感じていたのである。小川国夫の「手紙」と題するエッセイは、フォークナーに魅了された気持を率直に表明したコメントであると言えよう。

IV. 「土地・処女膜・死—フォークナー断想—」について

「土地・処女膜・死—フォークナー断想—」は、雑誌『ユリイカ』1972年(昭47)6月に掲載されたものである。ここでは主として、『響きと怒り』の第二章の主人公、クエンティン・コンプソンと妹のキャディについて論じられている。

先ず小川国夫が引用した『アブサロム、アブサロム！下』の9章の最後の会話を挙げて見よう。

- あと一つだけきみに聞きたいことがある。きみはどうして南部を憎んでいるんだい。
- 憎んでなんかいないさ、と、クエンティンは即座に、間髪をいれず、いった。
- 憎んでなんかいないさ。
- 彼は冷たい空気を、凍えるようなニューイングランドの暗闇を、はげしく吸い込みながら、心のなかで叫んだ。
- 憎んでなんかいないさ、ぜんぜん、ぜんぜん、憎んでなんかいないさ、憎んでなんかいないさ。²⁷⁾

上掲のクエンティンの言葉は『アブサロム、アブサロム！』下からの引用であるが、その中でクエンティンとシュリーヴとの会話である。『響きと怒り』で自殺したクエンティン・コンプソンが再登場しているのである。フォークナーは、『響きと怒り』においてクエンティンに南部を憎んでいないと言わせた。しかしそれは、フォークナー自身の言葉であったのではないか。フォークナー自身が南部を俯瞰的に見ていたことは、明らかなことであり、また南部を憎んでいないということも明らかなことであるのだ。

「憎んでなんかいない」というクエンティンの言葉は、南部繁栄の陰にあった人種差別を物語の底辺に据えた、フォークナーの本音であるかも知れない。小川国夫はそのクエンティンの言葉を文の先頭にだしたのは、明らかにクエンティンの現実的な場面を見せる目的があったと思われる。彼は土地を売って学費としたことに見合うだけの勉学を続けてから自ら川に身を投げたのであった。クエンティンはそれに見合うだけの力量はあったが、フォークナーは、地域社会の変質をクエンティンに担わせたとと思われる。

小川国夫は、妹キャディに現実的な娘としての評価を与えている。彼女は土に生きる素朴な肉体の持ち主であったと言っているのだ。キャディは兄が死を愛していることは知っていたし、兄の思い通りにさせてやるのが賢明だと信じていた。キャディに対する小川国夫の見解を示す次の言葉を挙げてみよう。

ここで私は、独特な表現に行き当たり、考えたのだ。それは、兄が愛している死に対して、妹が(嫉妬は感ぜず)という箇所だ。なぜなら……。と私は考える。彼女にとって死が余りにも無意味なものだから、兄がそれを愛しているにもかかわらず嫉妬することもできないのか、或いは、一片の土地の喪失が兄にとって痛恨事であったと同様に、彼が彼女の処女膜に与えた値打ちは間違った愛にもとづくもので、(つまり、本来男がそのために生きたり死んだりするものでは処女膜などではないし)兄が他に愛しているものがあるなら、(略)兄が愛しているものだから、それは佳いものだと思ったに違いない。キャディは(計算と思案の末)彼をそこへ行かせたわけだ。彼女はかしこく温かい娘だったから、たとえ闇に思いが乱れても、少なくとも愛する兄に関しては、正しく直感して、そして自分の判断を確信したに違いない。²⁸⁾

このような小川国夫の言葉は、キャディの土に生きる姿を、言外に支持していると考えられる。キャディは、まさに現実を把握した考え方であって、死はキャディにとっては「無意味」なものであったに違いない。彼女は生きる方向に向かって行った。「彼女はかしこく温かい娘だったから、たとえ闇に思いが乱れても、」というキャディの心象はあったにせよ、彼女は兄クエンティンと決別したのである。

小川国夫がリアリズムに徹していることは、キャディの生き方に対する考え方によっても明らかである。彼は、「文学の小道」²⁹⁾と題する講演の中において、キャディが第一次大戦に関してヨーロッパにおいてドイツ軍の将校と華やかな生活しているということを語った。この講演でのことを思うとき、小川国夫の現実での生き方に関することが如何に重要であるかが思われた。これも一つの小川国夫のリアリズムな見方に拠ることの明かしであるだろう。

V. 講話の中から—「死のデザイン」について—

小川国夫は幾度となく講話を引き受け、その都度自分の文学観及び創作に関して言及している。いまそうした中から、キーワードともなるような言葉として、「死のデザイン」なる言辞を見出しに含む講演録を繙くとしよう。勿論、これは彼が主賓のグループ藤枝文学舎の機関誌「藤枝文学舎ニュース」第28号1999年(平成11)4月1日発行)に載る「くにおの談話室」⑭が「W・フォークナーから兼好・芭蕉・龍之介」で、この回の小題「死のデザイン」となっている。ここでの小題とした理由である。

さて、戦後の日本でフォークナーが大変な流行になったことは周知のことである。フォークナーに影響を受けたことについて、彼は次のような発言をしている。

この時代をアメリカ文学の時代という人がいます。戦後日本にはアメリカ文学の影響が非常に深かった。その前はフランス文学とロシア文学の時代ですね。アメリカ文学というのはそれほど読まれてなかった。けれども1950年代頃から殆どアメリカ色というほどアメリカ文学が強かった。僕はその辺が本腰を入れて読んだ時代ですから。(略)僕と同時代の作家、丸谷オーとか大江健三郎とかね、みんなアメリカ文学の洗礼を受けています。フォークナーばかりでなくヘミングウェイとか。³⁰⁾

上掲の小川国夫のフォークナーに対する考え方を思うとき、丸谷オー(1925～)もまた大江健三郎(1935～)もともにフォークナーばかりでなくヘミングウェイ(1899-1961)の影響を受けていることになる。小川国夫は、ヘミングウェイに関心を示したが、最も影響を受けたのは、やはりフォークナーであった。丸谷オーにしても大江健三郎にしてもフォークナーに大きな影響を受けたことは明らかなことである。

フォークナーは、『響きと怒り』のクエンティンに、どのような死を望んでいたのだろうか。クエンティンの死の描写について小川国夫の見解を次に挙げてみよう。

フォークナーは死とは皆さんが考えてるようなものではありませんということを教えてください。たとえば茶碗というのは、どこにも出口のないようなボールのようなものを作って、これ茶碗だと言って茶碗として使えないからそういうことをする人はいない。でも死はどのような風にデザインしてもいいですから。だからデザインの仕方が文学だと言える。³¹⁾

上掲の発言については特に「でも死はどのような風にデザインしてもいいですから。だからデザインの仕方が文学だと言える」とあるところ、この描写方法の絶妙さは肯けるものである。さらに「デザインの仕方が文学だと言える」とあるところでは、デザインという言葉の意味をさらに考えることになる。すなわち、意匠することに他ならない。実際の死とは現実的な場面が加わることになるが、言葉としての「死のデザイン」とは、死に直面

している人が見るかも知れない、宙吊にされた幻影であるという感覚は残る。小川国夫は上掲の発言から『響きと怒り』の第2章の主人公、クエンティンについて次のように述べているので幾分長く引いてみる。

フォークナーに還って言うと、フォークナーは実に見事に書いています。自殺の考え方はいかに人間を強く捕らえるか、いかにそこから抜け出られなくなるか。(略)「響きと怒り」(昭和4年)という作品中でクエンティンという青年がいます。いそいそと自分を待っている女性の体の中へ飛び込むように自殺したというんですね。死というのは女性なんですね。フランス語で死は女性名詞なんです。死が本当に待ってるということはないから、クエンティン自身の想像なんですね。(略)フォークナーはハーバート大学の「卒業式の日」という章を作ってその日一日をクエンティンがどんなふうと考えて行動したか書いてある。(略)クエンティンは優等生になってこれでけじめがつかしましたって自殺する。³²⁾

上掲の小川国夫の発言によるクエンティンの死は、フォークナー自身が想像した死についての一つの例だと考えられる。クエンティンがいそいそと恋人の体の中に入って行くように、自らを川の中に溺れさせるという捉え方に異論はない。妄想を持った人物が、周囲のことから孤立してしまい自身の心の暗闇に沈んで行く。そんな一途な思い込みが行動となって行くと考えられる。クエンティンの自殺については、「死のデザイン」に過ぎないと小川国夫は捕らえているのだ。

この死を愛するクエンティンに対してキャディは、兄クエンティンの思いをそのまま認めて、兄の好きな方向へ行かせたのである。キャディの現実に生きる賢さについては、すでに取り上げたのでここでは省略する。

VI. 「フォークナーと暴力」について

「フォークナーと暴力」は、『小川国夫全集』第10巻1995年(平成7)に収載されたものであるが、ここに掲載された小川国夫のコメントは、彼の作品作りの枢要点であると思われるので次に挙げて見よう。

そこはわずかに過去のはかない栄光というようなものを心に奉じて、消極的な農村の生活を営む人々が住んでいるところである。地方の村や町にも少しの動きはある。しかしそれは、どうだというほどのことではなかったのだ。³³⁾

上掲は、ジョン・フォークナー著『響きと怒りの作家—フォークナー伝—』の訳者佐藤亮一という言葉である。訳者佐藤亮一は、フォークナーの郷里であるミシシッピ州北部の農

村地帯で静かな処に、実際に行ってみて、このような場所から数々の名作と言われる物語が生まれている、と言ったことは想像もできなかったと言っているのだ。このような佐藤亮一の感想は、筆者に小川国夫の言葉を思い出させた。それは、次のようなことであった。

静岡県駿河湾西岸から、土地が持つ影響力を重視した物語を書いた。そして風土から物語を引き出す方法がわかった。そのようなやり方をして、ミシシッピへ行くと、フォークナーも同じようなやり方で、ミシシッピから物語を引き出していることがわかった。³⁴⁾

この小川国夫の言葉にもあるように、フォークナーの郷里、ミシシッピへと行った小川国夫の実感であることが肯ける。すなわちフォークナーと小川国夫は、お互いに会うというチャンスには恵まれなかったが、彼はフォークナーのストーリー・テラーとしての素質に魅了されていた。故郷を物語の舞台としていたことについては、小川国夫とフォークナーは同じ道筋を辿っていたのであったと言えよう。最後になったが、小川国夫が挙げたフォークナーの言辭を次に挙げたい。

私は暴力の国に住んでいます。³⁵⁾

このフォークナーの言葉を聞いたときの小川国夫は、「彼は物語の土地に立っている」と思ったとある。現在、世界は多くの面において、「暴力的」な面が目立っている。アメリカにおいてキング牧師が射殺されてから、様々な暴力が21世紀の我々の眼前に繰り広げられた。このことに関して小川国夫は、フォークナーであれば、如何に小説化したであろうと結んでいる。小川国夫のフォークナーに対する次の言葉を挙げて見よう。

フォークナーは、不可避免的に、〈あまりにも多くのものを読みとろう〉とさせる人だ。³⁶⁾

上掲の発言によると、小川国夫は、フォークナーの手にかかると、今まで何の意味も持たなかった言葉が、活気づいてくると述べている。また、避けられないほど多くのものを読者に与えようとしていることも事実である。これらのことを考える時、彼の小説は、言葉の表現だけではないように思われる。

フォークナーの読者に与える影響として考えられるのは、多くの合成語であるだろう。それらは、辞書には掲載されていない単語である。また、フォークナーの英語力の偉大さを知らされることにもなるであろう。彼は、あらゆる英語の文法を駆使した表現を用いている。すなわち、同じような単語を繰り返し使うことは少ないし、英文の構成も複雑である。その上、しばしば文法を無視した英文が出現するのだ。彼の小説の中では、厳格な英

文法に即した英文と、それとは逆に文法を無視した英文が並列しているのである。このような方法によってフォークナーの描写は、広い意味での複雑な場面を描出していると考えられる。

フォークナーの小説の隠された読み解きは、探偵小説的な面もあることについて、すでに小川国夫のエッセイ「情熱の探求者」により読者は知っている。

解り難いフォークナーの文については、ジョン・フォークナーの言う通りストーリー・テラーとして読み進めて行くのが好ましいと考えられる。小川国夫もジョンの言うように読めと言っている。そしてさらに、フォークナーの小説を読む時には、待つ姿勢をとって、残虐な人やずるいや貧しい人、苦悩する人を知ることであり、これらの人々がフォークナーの見事な筆さばきで再現されることによって、自分の心と照らしあわせてみることである。それは、「自分自身を知ることにも繋がることである」と、小川国夫は補足しているのだ。

結語

小川国夫は、世界を自分の足であるいている。彼は東京大学の学生であった頃フランスのソルボンヌ大学へ行った。その後、フランス、イタリア、ギリシャを経て地中海の島々を自分自身の視点で探ったのである。またサハラ砂漠のオアシスにも多大の興味を示した。アメリカでは、ミシシッピのフォークナーの故郷であるところを訪ねていることを筆者に話された。そして如何に人間が生きているかを探るために、多くの人々に接し、その土地に生きる全てを熟知して行ったと考えられる。如何に生きるべきか。と、自我の奥深い暗闇と対座しているであろうことが偲ばれる。小川国夫の作家として不動の立場を築いて行ったのは、そうした彼の尽きぬ好奇心とチャレンジ精神であったのではないか。その上彼は、21世紀の現在も活躍中のクリスチャン作家であったのだが、「帰天」したことは既に述べた。

フォークナーはすでに20世紀に活躍した歴史上の人物である。フォークナーが残した文学上の手法は日本においても、取り入れる作家は多数存在する。その限りにおいて、小川国夫もフォークナーを敬愛する作家の一人であった。

小川国夫とフォークナーの解釈上の違いを挙げるとすれば、小川国夫は現実的(Realistic)な表現に関わるが多かったのに対して、フォークナーは歴史的(Historical)な表現に関わるが多かった。しかし、『聖書』が二人の作家の基本をなしていることには変りはないのである。

注

- 1) 大橋健三郎他編『アメリカ文学史—総説—』(研究社1975)3頁。
- 2) 同上。

- 3) 同上。
- 4) 同上。
- 5) 同上。
- 6) 「アメリカの文化の基底には『聖書』があるように、日本でいうと平家物語の基底には『仏教』がある」と、小川国夫は筆者の質問に答えられた。「小川国夫氏を囲む会」を静岡クーポール会館にて開催された時、平成 18 年 8 月 4 日。
- 7) フォークナー『死の床に横たわりて』（富山房 1995）245 頁。
- 8) John Faulkner, *My Brother Bill* (Oxford, Mississippi: The Yoknapatawpha Press 1975) P. 244.
ジョン・フォークナー『響きと怒りの作家—フォークナー伝—』（荒地出版 1964）213 頁の訳による。
- 9) 7) と同じ
- 10) 同上、248 頁。
- 11) 「最も新しい手法で、最も古い枠の中で書いたのが『響きと怒り』である」と小川国夫は、筆者に解説していただいた。(6) と同じ「小川国夫氏を囲む会」、〈最も古い枠とは、『旧約聖書』のことを示唆していると思われる〉。
- 12) William Faulkner, *As I Lay Dying* (New York, A Division of Random House Inc. 1930) p. 3.
フォークナー『死の床に横たわりて』（富山房 1995）246 頁の訳による。
- 13) 『旧約聖書』「サムエル記上」9-2 にある記述からの引用。
- 14) フォークナー『死の床に横たわりて』（富山房 1995）253 頁。
- 15) 大橋健三郎教授還暦記念論文集刊行委員会『文学とアメリカⅢ』1980 121-122 頁。
に次のようなことが書かれている。（「手紙」と題する論文のなかにおいて、「例として引用した箇所は適切でなかったように思えてきたんです。この種の引用ならもっといい箇所がありそうです。ここではフォークナーは〈空耳〉ということをきわ立たせた。そして〈空耳〉の内容は〈死臭についての発言〉だったと思われます。」とあるので、〈空耳〉は〈死臭〉であった。）
- 16) フォークナー『死の床に横たわりて』（富山房 1995）257 頁。
- 17) 同上、255 頁。
- 18) 岡庭昇『フォークナー—吊るされた人間の夢—』（筑摩書房 1975）177 頁。
- 19) フォークナー『死の床に横たわりて』（講談社文芸文庫 2000）185 頁。
- 20) 小川国夫「フォークナー世界の構図」（筑摩世界文学大系 73 の付録に掲載された）3 頁。
- 21) 同上。
- 22) 同上、4 頁。

- 23) 同上。
- 24) 大橋健三郎教授還暦記念論文集刊行委員会『文学とアメリカⅢ』1980 117頁。
- 25) 同上。
- 26) 小川国夫は「文学の小道」と題して日本大学法学部本館にて第1回国際文化表現学会において講演。2005年5月14日、その講演の中で、『旧約聖書』の「サムエル記下」のダビデとアブサロムについて話された。
- 27) フォークナー『死の床に横たわりて』（講談社文芸文庫、1998）256頁。
- 28) 『ユリイカ』青土社、1972年6月号、27頁。
- 29) 26)と同じ、その講演の中で、キャディのことについて言及した。
- 30) 「藤枝文学舎ニュース」の「くにおの談話室 14」W・フォークナーから兼好・芭蕉・龍之介—死のデザイナー—。
- 31) 同上。
- 32) 同上。
- 33) ジョン・フォークナー『響きと怒りの作家—フォークナー伝—』（荒地出版社、1964）249-250頁。
- 34) 「小川国夫氏を囲む会」が2006年4月1日に静岡クーポール会館において開催されたとき、〈ミシシッピへ行ってみたら何もない田舎であったが、フォークナーはそこから物語を引き出していた〉。小川国夫は筆者にこのような話をしてくれた。
- 35) 小川国夫『小川国夫全集 10巻』（小沢書店、1995）411頁。
- 36) 同上、412頁。

参考文献

—日本語文献—

【単行本・小川国夫作品】

- ・ 小川国夫『サハラの港』小沢書店、1952
- ・ 小川国夫『小川国夫の手紙』海豹社、1953～1956
- ・ 小川国夫『試みの岸』河出書房新社、1972
- ・ 小川国夫『或る聖書』筑摩書房、1973
- ・ 小川国夫『静かな林』先駆文学館、1973
- ・ 小川国夫『小川国夫作品集』1～6・別巻、河出書房新社、1974～1976
- ・ 小川国夫『流域』河出書房新社、1975
- ・ 小川国夫『アフリカの死』集英社、1980

- ・ 小川国夫『逸民』新潮社、1987
- ・ 小川国夫『小川国夫全集』1～14、小沢書店、1992～1995
- ・ 小川国夫『悲しみの港』朝日新聞社、1994
- ・ 小川国夫『マグレブ、誘惑として』講談社、1995
- ・ 小川国夫『悲しみの港』朝日文芸文庫、1997
- ・ 小川国夫『ハシッシ・ギャング』文芸春秋社、1998

【翻訳書・フォークナー作品】

- ・ フォークナー、滝口直太郎訳『フォークナー短編集』新潮文庫、1955
- ・ フォークナー、加島祥造訳『八月の光』新潮文庫、1967
- ・ フォークナー、高橋正雄訳『八月の光』河出書房新社、(世界文学全集 45) 1970
- ・ フォークナー、阪田勝三・他訳『フォークナー全集』第1巻～第27巻富山房、1967～1997
- ・ フォークナー、高橋正雄訳『響きと怒り』講談社文芸文庫、1997
- ・ フォークナー、高橋正雄訳『アブサロム、アブサロム!』上下、講談社文芸文庫、1998
- ・ フォークナー、佐伯彰一訳『死の床に横たわりて』講談社文芸文庫、2000
- ・ フォークナー、平石貴樹・新納卓也訳『響きと怒り』上下、岩波文庫、2007

【内外の関連書物】

- ・ 梶井基次郎、『檸檬』新潮文庫、2003
- ・ シェイクスピア、木下順二訳『マクベス』岩波文庫、1997
- ・ 世界文学大系 12、中野芳夫・小津次郎・西川正身・三神勲・木下順二・芥藤勇訳『シェイクスピア』筑摩書房、1959

【研究書】

- ・ 蟻 次郎『フォークナーの小説群——その〈全体化〉理論の展望』南雲堂、1966.
- ・ 大橋健三郎・芥藤光・大橋吉之助編『アメリカ文学史』研究社、1975
- ・ 大橋健三郎、『文学とアメリカⅢ』南雲堂、1980
- ・ 大橋健三郎、『ウィリアム・フォークナー研究全1巻』南雲堂、1996
- ・ 岡庭昇『フォークナー—吊るされた人間の夢—』筑摩書房、1975
- ・ 荻田元司・佐藤亮一・高村勝治他訳、『アメリカ小説論』V・O・A編 (*THE VOICE OF AMERICA'S FORUM LECTURES ON THE AMERICAN NOVEL*)、(Published in

Japanese translation with permission of the Voice of America) 北星堂、1967

- ・ 木田献市・西村俊昭・他『聖書の世界』I～VI、講談社、1970
- ・ 桑田和夫『小川国夫の世界』和泉書院、1984
- ・ ジョン・フォークナー、佐藤亮一訳『響きと怒りの作家—フォークナー伝—』荒地出版社、1964
- ・ 新鋭作家叢書『小川国夫集』河出書房新社、1971
- ・ 勝呂奏『小川国夫文学の発端—アポロンの島—』双文社、1993
- ・ 勝呂奏『荒野に呼ぶ声—小川国夫文学の樞奥—』審美社、2000
- ・ 田中久男『ウィリアム・フォークナーの世界』南雲堂、1997
- ・ 日本ウィリアム・フォークナー協会『フォークナー事典』2008
- ・ 平石貴樹『メランコリック デザイン』南雲堂、1993
- ・ 平石貴樹『小説における作者のふるまい—フォークナー的方法の研究—』松柏社
2003
- ・ 四方田^{よもたきとし}敏『フォークナーの言語と文体—言語学的アプローチ—』文化書房博文社、
1997
- ・ リチャード・チェース、待鳥又喜訳『アメリカ小説とその伝統』北星堂書店、1960
- ・ ロバート・W・ハン布林、チャールズ・A・ピーク共編『フォークナー事典』2006

【雑誌等】

- ・ 『英語青年』 第127巻第5号、研究社、1981・8
- ・ 大橋健三郎「無言の交友」〈『小川国夫全集』3、付録〉小沢書店、1992・1
- ・ 『解釈と鑑賞』〈特集・小川国夫と古井由吉〉第182号、至文堂、1977・3
- ・ 『解釈と鑑賞』〈特集・内向の世代 最後の純文学〉 第71巻6号、至文堂、2006・6
- ・ 『国文学』〈現代作家便覧〉第35巻第6号、学燈社、1990・5
- ・ 花輪莞爾「不思議な明るさと骨太の暗喩—小川国夫著『試みの岸』—」〈書評〉『波』
第6巻第8号、新潮社、1972・9
- ・ 平石貴樹「『八月の光』の作者のふるまい」1～12、『英語青年』第145号、研究社、
1999・4～2003・3
- ・ 『藤枝文学舎ニュース』第1号～第58号、藤枝文学舎を育てる会発行、1991・8～
2006・10
- ・ 福田はるか「小川国夫『ヨレハ記』におけるメッセージ——キトーラ譚の中から」『三
田文学』第86号、2006・8
- ・ 村上^{あきら}東「Carvel Collins の “The Interior Monologues of *The Sound and The Fury*”

について」『秋田大学教育学部研究紀要 人文科学・社会科学』[ISSN:0387-0103](秋田大学附属図書館)39 1988・7 p. 61-71

- ・ 『ユリイカ』〈特集・フォークナー〉第29巻第15号、青土社、1997・12

—英語文献—

【単行本・フォークナー作品】

As I Lay Dying / Light in August / Absalom, Absalom! / Collected Stories / The Sound and the Fury (New York. Vintage International Vintage Books, A Division of London House, Inc.) 1929-1948

【研究書】

- ・ Chase, Richard *The American Novel And Its Tradition* (Princeton Baltimore and London The Johns Hopkins UP) 1956
- ・ Faulkner, John *My Brother Bill* (New York, Trident Press) 1963
- ・ Shakespeare, William *Macbeth* (London, Penguin Books Ltd.)1967
- ・ *The Merrill Studies in The Sound and the Fury* (Compiled by James B. Meriwether University of South Carolina) 1970
- ・ *The Holy Bible* (Printed for the outreach ministry of the American Bible Society by the Zondervan Corporation with permission from the International Bible Society) 1973
- ・ Faulkner, John *My Brother Bill* (Oxford, Mississippi: The Yoknapatawpha Press) 1975
- ・ *Faulkner Six Decades of Criticism* (Edited by Linda Wagner-Martin Michigan State UP) 2002